

リスクコミュニケーション手法の改善の取り組みと教育プロセス

○梅澤 雅和^{1,2}、難波 美帆^{3,4}、石村 源生⁵

¹ 東京理科大学 総合研究機構 戦略的環境次世代健康科学研究基盤センター

² 東京理科大学 薬学部 衛生化学研究室

³ 早稲田大学 早稲田大学大学院 政治学研究科 ジャーナリズムコース [J-SCHOOL]

⁴ 現：北海道大学 創成研究機構 URA ステーション

⁵ 北海道大学 高等教育推進機構 高等教育研究部 科学技術コミュニケーション教育研究部門 [CoSTEP]

研究の背景

我々は日常生活の中で、様々な要因がもたらす危険性（リスク）に向き合っている。リスクに効果的に対応するためには、それに関わる情報が効果的に伝達・共有（リスクコミュニケーション）される必要がある。リスクコミュニケーションは、聞き手の行動変容を促しリスク回避が実現することで効果を発揮する。しかし、2011年3月に発生した福島原子力発電所事故後の例のように、政府やマス・メディアが行うものも含め、リスクコミュニケーションは必ずしもうまくいかないことが多い。この事実は、リスクに関して社会に存在する葛藤や論争を解決できるコミュニケーションとは何かという課題を提示している。とくに、幼少児の健康に及ぶ環境リスクには社会的論争を招きやすく、十分な注意をして対処すべき課題の一つである。

一方で先行研究において、リスクコミュニケーションに際する情報提供者のリテラシーが問われることはなかった。本研究では、情報提供者が抱えるこのリテラシーの限界に起因する不安や懸念に注目した。とくに、あるコミュニケーション手法を取ることでメリットとデメリットが生じ、不安や懸念に対する対処をしづらい場面を「ジレンマ状況」として焦点を当てた。

研究目的

本研究は、リスクコミュニケーションに際して遭遇し得るジレンマ状況を、パターン・ランゲージの手法を用いて形式知化することを目的として実施した。あわせて、この形式知化をワークショップ形式で行うことにより、集団内の経験知・暗黙知を形式知化するプロセスを参加者に体験してもらった。それにより、様々な立場の人が各々の目的に合う形でパターン集を作成するプロセスの、プロトタイプを提示することを目指した。

方法

パターン抽出のためのワークショップの設計と遂行

本研究では、リスクコミュニケーションの場面で繰り返し起こりうる類型的・普遍的な問題やジレン

マ状況のパターンを抽出し、列挙することを目的とした。ジレンマ状況は、次のような特徴を持つものと定義した。

- 容易に解決しがたい。
- 分野をまたいだ共通点がある。
- それぞれの解決手法にはメリットとデメリットがある。

その目的を果たすために、本研究では「文脈、問題、対処案」をリスクコミュニケーションに際するジレンマ状況のパターンとし、次のフォーム（図）を作成し、ワークで使用した。

- 文脈
 - リスクコミュニケーション場面を規定する前提条件
 - 「何についてのリスクか」「リスクの情報源は誰か」など
- 問題
 - リスクコミュニケーション担当者の立場に立ったとき、上記文脈のもとで起こり得る様々な問題
- 対処案
 - 問題を解決ないし緩和するための対処案
 - その対処案を採用した場合に結果として起こることが想定される、メリットとデメリット

リスクの情報提供者の遭遇し得るジレンマ状況の形式知化は、リスクコミュニケーションを学ぶ早稲田大学大学院集中演習の中で、ジャーナリズムコースの学生と、一般社団法人サイエンス・メディア・センター（SMC）夏期集中ワークショップへの参加者の協力の下に、3日間（2012年8月10日～12日）のワークショップ形式で実施した。

ワークショップの学習目標と達成度評価

本ワークショップにおいては、参加者に以下の3点を達成してもらうことを学習目標とした。

- リスクコミュニケーションには必ずしも正解のないジレンマ状況があることを理解してもらうこと。
- グループワークによって、上記のジレンマ状況を横断的に見渡した時に見られる共通の形式（＝「パ

- ターン・ランゲージ)を抽出すること。
- c) 自らの経験からリスクコミュニケーションのジレンマ状況を抽出し形式知化する、抽象化スキルを獲得してもらうこと。

あわせて、ワークショップ参加者の学習に関する達成度を以下の項目により評価した。

- A) リスクコミュニケーションについての理解を深めることができたか。
- B) 多様なリスクコミュニケーション場面に対応できる「構え」を身につけることができたか。

結果

ワークショップには、研究者、ジャーナリスト、大学院生、科学コミュニケーターの計18名(ワーク前半[2日目、ワーク1日目]は20名)が参加した。3日間のワークショップの後、語の用法やパターンとしての文章形態を統一し、結果として51個のパターンが10個のグループに分けられる形で抽出された。グループは以下の10個となった。

1. 聞き手の理解を得られない
2. メディアの誤情報に対応できない
3. 社会の中での役割まで問われる
4. 意見や判断まで問われる
5. 情報伝達テクニックに不安がある
6. コミュニケーターの側にある問題
7. 信頼関係の問題
8. 情報が扱いづらい
9. 緊急時にリスクを伝える
10. コンテンツに依存したジレンマ状況

学習目標の達成度評価については、先に示した2つの評価項目に対して、本ワークショップは一定程度の成果を挙げることができた。一方で、リスクコミュニケーションのジレンマ状況のパターン化・可視化の試みを行ったことにより、同様の試みを行うときに起こり得る課題も明らかになった。とくに、このワークショップへの参加者らが様々な背景や経験を持っている状況で、1) ワークを通して何を抽出しようとしているのか、2) ジレンマ状況をどのようにパターン(問題や対処案)の中に表現するかを共有することは容易ではなかった。また、ワークショップを終えた時点では、「問題『価値観が違う』→「対処案『価値観をそろえる』」のように、対処案が問題を裏返しただけの記述になっているパターン・ランゲージが複数存在した。

考察

本ワークショップでは、参加者どうしが様々な立場や自らの体験を踏まえて、リスクコミュニケーション

で生じ得るジレンマ状況の抽出を行った。それにより、実際にコミュニケーターや専門家がリスクの情報提供を行う場に臨むに際して、その場で取れ得るコミュニケーション手法を確認できるパターン集を作成することができた。ワークを通して参加者どうしが議論し合い、体験や考えやを共有したことで、暗黙知であったリスクコミュニケーションのジレンマ状況の形式知化は一定以上の成果を収めたと考えられる。今後、同様の試みが複数行われることにより、より全体を網羅したジレンマ状況の体系化が進むことが期待される。

また、ワークショップで得られたパターンの素案を推敲・校正するなどのフォローアップをしたり、同じような教育プロセスを繰り返し行ったりすることが有効であろう。とくに、幼少児の教育や保育の仕事に携わる人々は、環境が健康に及ぼすリスクを子ども自身や保護者に説明することを求められることが少なくない。そうした人々を交えて同様の試みが行われることで、幼少児の健康をより効果的に守っていくことができるのではないかと期待される。

結論

本研究では、社会に横たわる様々なリスクや葛藤と向き合うコミュニケーターがワークショップに集まり、リスクコミュニケーションで発生し得るジレンマ状況の抽出と共有を行うことができた。また、そのプロセスは参加者にとってリスクコミュニケーション手法を学べる学習効果を発揮した。

我々は誰しも、日常の仕事の中で、身の回りにあるリスクを説明し、情報提供を求められる場面に遭遇し得る。これは、子どもの健康や安全と向き合う教育・保育・スポーツクラブ等の現場で活躍する人々も例外ではない。今後、同様のリスクコミュニケーション手法のパターン抽出・形式知化の試みが様々なコミュニティにより繰り返し行われることにより、人々に効果的な行動変容とリスク回避を促すコミュニケーション手法がより洗練された形で示されることを期待したい。

謝辞

本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金・若手研究(B)[24790130](梅澤、2012~13年度)ならびに私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「環境と次世代健康科学-疾患原因解明と予防に向けた先進的研究」(代表=武田健、2011~2015年度)の支援を受けて遂行した。ワークショップの実施に際しては、早稲田大学東日本大震災復興研究拠点、先端環境医工科学研究所、先端科学・健康医療融合研究機構の支援をいただいた他、ファシリテーターとして浦山絵里様、菅野綾子様、高尾戸美様のご支援をいただいた。

